

啄木・樗牛・自然主義

—— 啄木の樗牛受容と自然主義 ——

田 口 道 昭

石川啄木は、その短い人生において、同時代の文学や思想を摂取し、自家のものとすることによって、その思想を形成していった。本稿では、啄木の思想形成の上でもっとも影響を与えた文学者・思想家である高山樗牛との関係、また、樗牛の受容がその後の自然主義批判にどのようなつながっていったのかという問題を中心に、啄木の思想形成について考察したい。

一

啄木は、評論「時代閉塞の現状」（明四三・八下包）において、「明治の青年」の精神史の変遷をたどる中で「青年自体の権利を識認し、自発的に自己を主張し始めたのは」「日清戦争の結果によつて国民全体が其国民的自覚の勃興を示してから間もなくの事」であるとし、「自然主義運動の先蹤として一部の間に認められてゐる如く、樗牛の個人主義が即ち第一声であつた」としている。このような見方は、安倍能成の「自己の問題として見たる自然主義思想」（『ホトトギス』明四三・二）において、「兎に角自分達は氏によつて粗笨ながらも『我』といふものを教へられ、『我』の自覚を有するに至つたと思ふ。我等は恰も恋するものゝ如く、このロマンチックな心持を、極めて華やかに涙多く、熱き血のめぐりもて経験した」と回想されていることにもうかがわれる。

啄木・樗牛・自然主義

さて、啄木自身の樗牛受容は盛岡中学校時代から始まった。友人であった伊東圭一郎の回想^①によると、級友ら数名による英語のユニオン・リーダーを自習する「ユニオン会」の集まりで、明治三十三年頃より「太陽」に掲載された樗牛の評論が評判となり、啄木はそれに傾倒していったという。伊東が「啄木からドイツの哲学者ニーチェの超人論や天才論を聞かされた」と書いているのは、樗牛の「文明批評家としての文学者」（『太陽』明三四・一）以降のことを指すだろう。そして、現行の『石川啄木全集』に「高山樗牛」の名が登場するのは、評論「寸舌語」（『岩手日報』明三五・三・一四）からである。

◎『太陽』誌上の姉崎博士の論文『高山樗牛に答ふるの書』完結せり。其高邁なる識見欣度すべき態度共に能く一世を圧すべし、彼の独逸の文明を痛罵し、日本現代の風潮を諷刺するに至つては吾人案を拍つて叫ばざるをえず。ニーチェを説き、プリチズムを説き欧州文明の思潮を透視して祖国幾多の迷へる者を誡む。其暗々裡に樗牛氏を諷する想と筆と共に近來の大論文なり。

◎高山博士病重りて枕に就くと、蓋しわが文壇の恨事なり。文芸時評の欄、桂月氏代りて筆を取る。愚劣遂に見るべからざるを如何にせん。天溪の『新思潮とは何ぞ』汝何ぞしかく没分曉なる。然れどもニイチエニズムの誤りたる反面の評として、吾人斯の如き論者ある

を忘るべからず。

樗牛は、この年一二月に死去したが、啄木が言及しているのはその最晩年の動向であり、姉崎嘲風の「高山樗牛に答ふる書」（『太陽』明三五・二二三）を通してのことである。この評論は啄木にワグナーを注目させるきっかけとなったものであり、「樗牛を諷する想」という言葉から、このとき啄木が嘲風により傾斜していたこともうかがわれよう。啄木は、『太陽』に掲載された、この嘲風、樗牛の往復書簡に大きな刺激を受けていく。

また、「ニイチエニズムの誤りたる反面の評」とされている長谷川天溪の「新思潮とは何ぞや」は、同じ『太陽』の明治三十五年三月号に掲載されている。天溪は、「ニイチエ主義」を「個人主義、本能至上主義、自我発展主義」としたうえで、「本能至上主義」とは、「昔日のロマンチズム一派が、感情と想像とを生活の中心としたるが如く、一切の形式を棄て、自我（重に感情及び想像）の自由活动を尚ぶもの」であると述べ、「科学的事実」や「科学的法則」、「自然法則」が消滅、破壊、蹂躪され、「歴史」や「発達」が無視されたり、否定されたりするとして疑問を投げかけている。

天溪は、樗牛が「美的生活を論ず」（『太陽』明三四・八）を発表したとき、「美的生活とは何ぞや」（『読売新聞』明三四・八・一九、二六）を発表し、いち早く疑問を表明している。樗牛が人生の目的とは「本能の満足」、「人性本然の要求」を充たすことであり、それが「美的生活」であると述べたことに対して、「美的生活といふものは、寧ろ人間本性の要求を斥けて、理想的要求に向ふ所に成立する」と批判し、さらに、登張竹風が、樗牛の美的生活論は「ニイチエの説にその根拠を有す」（『美的生活論とニイチエ』「帝国文学」明三四・九）と述べて樗牛を擁護したのに

対し、「ニイチエ主義と美的生活」（『読売新聞』明三四・一〇・二八）で、「ニイチエの哲学を根拠とすれば、人生の目的は肉体的快楽を追求するに在つて、其快楽を獲た者が、美的生活を送つたのである」と皮肉った。先の「新思潮とは何ぞや」も、こうした樗牛、ニイチエ批判の文脈の中にある。

啄木が天溪の見解を「ニイチエニズムの誤りたる反面の評」というのは、先述の伊東の回想にもあるように、啄木が樗牛、ニイチエに「我」の自覚の肯定、「文明批評家としての文学者」（『太陽』明三四・二）でいうところの「詩人」、「文明批評家」、「天才」、「超人」をみていたからにほかならない。

二

ところで、啄木の姉崎嘲風への傾倒は、先にも触れた通り、樗牛との往復書簡のかたちで綴られた評論をきっかけとするが、啄木の最初の上京の失敗という体験も大きいように思われる。「ワグネルの思想」（『岩手日報』明三六・五・三一、六・二、五、六、七、九、一〇）に見られるワグナーへの研究に没頭するのもこの時期からである。^②

「ワグネルの思想」には、直接樗牛や嘲風の名前は出てこないが、ニイチエとトルストイ、ワグナーの思想の比較は、樗牛や嘲風をはじめとする同時代評論の磁場の中にある。木股知史が指摘するように、「中島徳蔵の『ニイチエ対トルストイ主義』の枠組に、嘲風のワグネル理解を加えれば、啄木の『ワグネルの思想』の発想の基盤が明らかになる」^④。一方、木股は、それに還元できない部分として、人間が「現象」（物質世界）と「実在」（本源的な理念）^⑤の二界にわたって存在すると考えられていることを指摘している。この点について、啄木は次のように書いて

いる。

人間とは、所謂神の如く實在にのみある者でもなく、又現象許りに存ずる諸々機物でもない。能くこの両界に亘つて全分の調和を成す所に其究極の標的を有する者である。《中略》此問題は蓋しニイチエ、トルストイ両氏の分歧点であつて、又同時にワグネルが綜合の基源をも含むものである。

木股によると、『ワグネルの思想』の段階では、意志消滅か自己拡充かという倫理的な懷疑にもとづく二元と、『實在』と『現象』という物の心の二元という複層の構造が保たれているが、完成した二元二面觀では、『意志』と『愛』という二元が、『意志』の一元に統合されてゆくという。そして、この「物心二元から意志一元への変化の過程」は、「閑天地（十八）靈あるものは感応す」（明三八・六）にも書かれており、そこに「嘲風の導き」があつたという。

こうした、嘲風の受容によって失われていった啄木の物心二元の発想は、木股の指摘する北村透谷の「想—実」の発想のほかに、美的生活論争の中で、樗牛—ニイチエ—本能主義と理解されてきたこととも無関係ではないように思われる。

そして、それは、「ワグネルの思想」において、「超人」とは「権力意志の権化」であるが「世人が常に誤解するが如く、彼等の頭脳には決して利己の念慮—物質的慾望の外に何者をも認めざる—の一点と雖ども存して居るのではない」と書きつつも、「吾人の二元觀を以て論ずると、ニイチエは人間の差別性（物的）を見て他の平等性（心的）を視ない者である。否寧ろ差別を平等の上に置いて、相対的事実たる現象を、絶対的性質と誤想した者である」と啄木が書いていることと対応するだろう。

木股は「啄木は、ショーペンハウエルの『意志』を、『生活意志』というように、現実的次元に引きよせて理解しており、嘲風の宗教的なスピリチズムとは一線を画している」と指摘しているが、当時の啄木の念頭にはいわゆる「現象界」の、欲望をもった存在としての個人の問題があつたといつていいのではないか。それは啄木の中の現実指向というべきものである。国崎望久太郎は、啄木の樗牛の受容に対し、「ただ樗牛の美的生活論の中に内包されていた本能性欲の充足を要求する見地、もっともラジカルな進歩的見解がほとんど継承されていない。すくなくとも、人間を生物学的に把握し、そこに人間主義の基礎をおこうとする所謂自然主義的思想は、啄木には少しも顧慮されていない」と指摘しているが、少なくとも「ワグネルの思想」においては、そうした「自然主義的思想」がわずかであつても見られることに注目したい。

ここで樗牛に関連した啄木と嘲風の関係についてみると、啄木は、明治三十七年一月十三日に嘲風にはじめて手紙を送り、その後、樗牛を顕彰するために設立された「樗牛会」の趣意書を嘲風から受け取り、「岩手日報」へ「樗牛会について」という入会を勧誘する文章を発表しているほか、二月一日に盛岡に講演に來た嘲風に初めて会っている。それに先立つ一月三十日の日記には、嘲風の「性格の人高山樗牛」（「太陽」明三六・一二）を読んだとあり、また、盛岡で行われた嘲風の講演「信仰の人高山樗牛」は聞いていないようだが、啄木が嘲風のもとを訪れたのは、その講演の行われた晩のことであり、おそらく講演の内容も話題にのぼつたことと思われる。

「性格の人高山樗牛」は、「性格の人は、性格の要求にあらざれば動かず、生死猶枉ぐ能はざる根本要求の本能」を持った人であるとし、変転を重ねた樗牛の中に一貫するものを説明したものである。『己れに忠なれ』、嗚呼是れ彼の一生を貫く大警語なりき」と嘲風は書く。「信仰の

人高山樗牛」(『妙宗』明三七・三)¹²は、「自らを捧げて人に帰依せん為には、自らの自信自覚が明白鞏固にして、この自覚と相投合し得る偉大な人格を発見して之と合一するを要す」と述べ、樗牛は「自らを信じたるが故に、又信賴して己れを捧ぐるに足ると信ずる人に対しては、満幅の尊敬と絶対の同情とを注ぐを敢てしたり」という。そして、「樗牛が自己靈性の奥に入り、永遠の覚醒に依りて永遠に帰敬すべき大人格は、過去と未来とを『今』の一瞬に接し、久遠実成の妙法を自己の人格に実現し、色説したる宗教的大信者、大行者の中に中に発見せられたり」と述べ、樗牛の日蓮への「完全なる意気の投合」を指摘している。

姉崎嘲風は、「文は人なり」(『帝国文学』明四五・二)において、樗牛について、「個人の心靈天才の精神を尊重する方に向つて、茲に美的生活論となり、曾てのホイットマンに発見したと様の精神をニーチェに発見して、靈性の尊嚴、意志の力、人格の權威を高調或は達人の如くに人を教へ、或は悪魔の如くに世を罵倒した」と述べ、さらに美的生活論がむしろ樗牛の「根本性格に基づいた意志生活の余迸」であることを示唆している。「ワグネルの思想」以降の啄木の樗牛理解はこうした嘲風のスプリチュアリズムの線に沿ったものである¹³。

こうした樗牛観は、例えば、啄木の「秋草一束」(『盛岡中学校校友会雑誌』明三七・一一・二〇)における「自らのまことの『我』の中に、不変の色彩を読み、不滅の諧音を聞く者は、諸有困難、諸有災厄と健闘して、其『本然の必至』のために身命も亦重しとせざるなり」といった一節や、「真理と美との不滅のために凱歌を唱へ、偉大なる人格を以て一世に反抗する人のために進行の曲を奏せざるを得ず」という一節などにも投影されているように、詩集『あこがれ』も含め、当時の啄木の思想と文学活動に大きな影響を与えている。

三

しかし、樗牛がその時代の思潮に大きな影響を与え得たのは、そこには時代の要求や課題をジャーナリスティックに表現する才能があったからにほかならない。日本主義、個人主義、美的生活論、日蓮主義と彼の思想の変遷について語られる言葉は、その時々々の思潮の要求に応えたものであった。「美的生活論」が大きな論争を巻き起こしたのも、明治三十年代に「我」の自覚とともに、欲望を持った存在としての個人の問題がクローズ・アップされたからにほかならない。樗牛の真意がどうあれ、論壇は、樗牛、ニーチェの思想をそのようなかたちで理解しようとした。

そして、啄木の評論には、右のような視点を洗い清めたかのような嘲風經由の樗牛観に収まらない視点が顕在化してくる。その一つが天才主義の強調である。明治三十九年一月一日発行の「岩手日報」に掲載された「古酒新酒」では、「我今に当りて切実にニイチエと共に絶叫せんと欲す。凡庸なる社会は、一人の天才を迎へんがためには、よろしく喜んで百万の凡俗を犠牲に供すべき也、と」と書かれ、樗牛についても「故人樗牛博士によつて当時の思想界に要求せられし時代精神界の救済は、今猶依然としてパンを求めて石を得るのみの状態にあり」と書いている。こうした考え方の背景には、前年八月にユニオン会の仲間が、花婿欠席の結婚式やその後の盛岡での啄木の生活態度に反省を促すため、除名勧告を行っていることや、『小天地』第一号を発行したものの第二号発行のめどが立たず、自宅で懊悩していたことなどがある。「自己を信じ得る如くに信じうべき人、この世に自己一人の外になし。自己の次に信じうべき者は、恋人一人のみ」という言葉は、こうした周囲の人々との対立をうかがわせよう。これらは、「現実」を処する上での様々な葛藤や

苦悩となって、啄木の思想にも影響を与えずにはおかなかった。

なお、周知のとおり、啄木の教育論「林中書」（盛岡中学校校友会雑誌 明四〇・三）は、天才主義の考え方が色濃く反映されたものである。啄木の洪民村小学校での代用教員の経験に基づく発言や、日露戦後の文明批判、教育批判における卓逸な論など、今日にも見るべきものを有した教育論であるが、「教育の最高目的は、天才を養成する事である。世界の歴史に意義あらしむる人間を作る事である。それから第二の目的は、恠る人生の司配者に服従し、且つ尊敬する事を天職とする、健全なる民衆を育てることである」という言葉は、樗牛の天才論を踏襲しつつ、書かれたものだった。^⑭

また、「小児の心」という言葉がクローズ・アップされてくるのも、「古酒新酒」を契機とする。^⑮ 啄木は、「孤負の性」を持ち、「たゞ一向に己れの欲する道を行き、己の欲する所を行」つてきた自分が、「過去数月間の長き強き失敗を悔」いることもなく、「其由つて来る所を探つて改むる」こともないのは、「我が心余りに小児の如くなりければ也」だという。そして、「小児の心乎、小児の心乎、噫これ我が常に望む所なれば也」と記している。この「小児の心」という概念は、ワーズワースの受容も関係しているが、樗牛にも「嗚呼小児の心乎、小児の心乎。玲瓏玉の如く、透徹水の如く、名聞を求めず、利養を願はず、形式、方便、習慣に充ち満てる一切現世の桎梏を離れ、あらゆる人為の道德学智の繫縛に累はされず、たゞく本然の至性を披いて天真の流露に任かすもの、あゝ独り夫れ小児の心乎」（無題録 明三五・十）という文章があり、修辭的なものを鑑みれば、より樗牛との親近性がうかがわれるだろう。そして、ここで注意したいのは、この「小児の心」が、「本然の至性を披くもの」として説明されており、「美的生活論」の「人間の本来の要求」に通ずるものを持っていることである。樗牛には「吾等をして自然の児

の如く語らしめよ。夫の性慾の発動の醇なるものは、実にこれ天下の至美、人生の至楽也。性慾無きところに人生幾何の価値ありや」（性慾の動くところ）「太陽」明三四・一二）という文章もあり、嘲風が観念的に洗い清めてしまう以前の人間の内部の「自然」へのまなざしがあるように思われる。また、樗牛は、この「小児の心」という言葉で現実世界の中で汚されてしまわないものを考えているが、それは、啄木の「一握の砂」（盛岡中学校校友会雑誌 明四〇・九）の中で、ワーズワースの発想と結び付き、「今の世に見るに、人は成人たらむとして先づ小児を殺さざるべからず。噫、神は小児を作りき、然れども人は成人を作りぬ」、「小児こそ誠に成人の父たるべきなれ」と主張されることになる。以上のように、嘲風の理解に収斂してしまわない樗牛の発想が啄木の評論の中に顕在化してくるのである。

ところで、この時期は、「完成した一元二面観」（木股知史^⑯）が登場する時期でもある。「洪民日記」明治三十九年三月二〇日の記述には、「意志といふ言葉の語義を拡張して、愛を、自他融合の意志と解」き、「宇宙の根本を意志とし、この意志に自己発展と自他融合の二面」があると解し、「ワゲネルの示した人生の理想は、完全なる基礎に立つて、初めて真に我が最高最後の目的となつた」と書かれている。しかし、「一元二面観」は、ニーチェの哲学を止揚するものであつたはずである。ほとんど同じ時期の相矛盾する見地をどのように理解したらいいか。

ここで、注目しておきたいのは、啄木が、日露戦後の社会主義の登場に過敏な反応を示していることである。

余は、社会主義者となるには、余りに個人の權威を重んじて居る。さればといつて、專制的な利己主義者となるには余りに同情と涙に富んで居る。所詮余は余一人の特別な意味に於ける個人主義者で

ある。然しこの二つの矛盾は只余一人の性情ではない。一般人類に共通なる永劫不易の性情である。自己発展と自他融合と、この二つは宇宙の二大根本基礎である。

社会主義という物質的・現実的問題に対して、啄木は慌てて答えを提出しているように思われる。樗牛はかつて「人道の目的は衆庶平等の利福に存せずして、却て少数なる模範的人物の産出に在り。是の如き模範的人物は即ち天才也、超人也」（『文明批評家としての文学者』）と書いていたが、樗牛の天才論を信奉する啄木に社会主義を肯定することはできない。と同時に、樗牛——ニーチェ流の個人主義もワグナーによって止揚されねばならなかった。「一元二面観」は、こうして「自己発展」と「自他融合」を孕む「意志」の問題として理解された。ただし、これが世界に対する具体的な「認識」であるより「倫理」の次元において語られたものであることに注意したい。¹⁸⁾

この時期、「一元二面観」とニーチェ主義という二つの傾向は、前者が後者を止揚したものに見えながら、併行して展開されていく。¹⁹⁾

四

さて、北海道時代に書かれた「冷火録（三）」（『小樽日報』明四〇・一〇・三二）は、「超人と凡人」と題したコラムであるが、そこでは、進化論と超人思想とが結び付けられる。

進化の大法から考へても、人間が猴類から進化した如く、現在の人間即ち凡人の境遇から、更に夫以上の境遇即ち超人の境遇に進まうとする慾求は決して理のない事と云へぬではなからうか。

こうした考えは、評論「卓上一枝」（『釧路新聞』明四一・二）の中にも再登場するがここで注目したいのは、啄木がこの文章の前に、ニーチェの超人思想について、「学者の多数は此思想を本能満足主義と称へて、箇人々々の本能満足は社会を破壊する、社会の破壊は一切の文明をして動物的状态に帰らしむるのだと云つて、世の青年を戒めて居る」が、「已に人間に何等かの本能ありとすれば……已に其を本能と呼ぶからには、其本能を抜去つたなら人間にして真の人間でない事になりはすまいか」と述べていることである。ここで、啄木は「本能」の問題、欲望をもった存在としての個人の問題に向き合っているのである。

ところで、進化論とニーチェを結び付ける言説は、野村幸一郎が明らかにしているように、美的生活論争当時をはじめ、ニーチェを紹介する論説の中に見られる。²⁰⁾ 例えば、登張竹風は、「超人の意義解釈」の一つとして、「超人を以て超種となすにあり。この説はダアウインの進化論に基くもの、如し」と述べている（『フリードリヒ、ニーチェ』）。また、坪内逍遙は、「馬骨人言」（『読売新聞』明三四・一〇・二四）の中で、ニーチェの「芸術観は、言ふまでもなくシヨオペンハウエルの真返し、焼直しからはしまつたのであつたが、中ごろからルウソウの復初主義の煮返しやダアキン（ダアキン）の優勝劣敗論の生煮などを混合せて、つひにその倫理観（海豚汁台の暗汁にも比喩ふべき悪倫理観）を調理した」と書いている。また、中島徳蔵も「ニーチェの説に就きて」（『丁酉倫理会倫理講演集』明三六・二）の中で、「人間と云ふものは、実に生甲斐のない下等な弱い奴等であるから、之を進化論の真理に依つて改造して、人間以上の種類を拵へねばならぬと云ふので、其人間以上のエライ人、それを超人と言つたやうです」などと書いている。しかし、進化論と超人の結び付きについては、逍遙の発言はもとより、竹風も「こは転生説の如く、大なる詩な

り、空想なり、夢想なり」と書き、中島徳蔵も「スペンサー流の遺伝作用があるとしても、一代や二代で此超人間が都合よく出来るものでない、空な話である、故に間もなく是は間違だと云ふことをニーチェ自からも悟った」（『ニーチェ対トルストイ主義』「丁酉倫理会講演集 明三四・六・一五」と書くなど、否定的に見られていた。

また、樗牛自身、「文明批評家としての文学者」の中で、ニーチェについて、「哲学界に於てはヘーゲル以来、科学界に於てはダルキン以来、一代の思想を殆ど残り無く風靡し来りたる歴史発達説も、彼れの眼中には偽学者の俗論に過ぎざるものとなれり」と説明しており、また、啄木の評論にも何度か引用されている「新しき声の最早や響かずなりたる時、人は死語の中より所謂法則なるものを造り出だす。是れを以ての故也、所謂法則の榮ある処、そこには必ず生命の死滅あるは！」（『法則と生命』「太陽」明三五・五）という樗牛の言葉は、進化論をも否定したものとして考えられるだろう。^②

「冷火録」の啄木の発言は、三宅雪嶺の「人類が猴類の上に一階級を占むるが如く、超人が人類の上に一階級を占めんこと極めて難たし」という発言に対して、あえて異を唱えたものであるが、同時代思想の磁場の中に置いてみると、時代錯誤の感は免れない。もっとも啄木は、「超人」といふ語は畢竟近代人の理想を最も簡潔に現はしたものの、「何時の世に於ても社会に多数の凡人と少数の天才との戦闘が絶えぬ。此天才者が詮る所皆超人の境に憧るゝ勇ましい人生の戦士である」といったように、「超人」を言わば「憧憬」の対象とすることによって進化論との関係を比喩的なものにしてているが、いずれにせよ、啄木が超人思想と進化論とを結び付けようとしたことは、欲望する存在としての個人の問題を（啄木の理解する）樗牛、ニーチェ思想の文脈の理解しようとする試みにほかならなかっただろう。

ところで、このような啄木の試みの背景には、盛岡中学校中退者であり、いわば学歴社会からドロップ・アウトしていった啄木の優勝劣敗適者生存という社会ダーウィニズムに対する強い意識がある。日露戦後という時代と北海道漂泊の時代が重なる中で啄木は何度か「世に適者生存の語あり。我等恐らくは今の世に適せじ。されば我等遂に敗れぬ。然れども思へかし、真に永遠に死し果すべき者、果して我なるべきか、果た彼なるべきか」（『冷火録』）という言葉を書き留めている。現実には敗れても、それは「永遠」の観点からすると、「死し果すべき者」ではない、そうした観念が、啄木の拠り所だった。

評論「卓上一枝」（『釧路新聞』）は、自然主義思潮とそれまでの樗牛、ニーチェ流の天才主義、あるいは一元二面観との接合を試みたものだった。啄木は、自然主義を「どうにか成る」という言葉に代表させ、「自己を信じ深く個性の権威を是認する者にとりて、此上なき屈辱の声」であると指摘しつつ、「自然の力に屈服するは却つて動かすべからざる自然の力を以て自己の力とする」ことだという。そして、自然主義は「一切の法則と虚偽と誤れる概念とを破壊して、在るが俟なる自然の真を提げ来る」ものであると説明する。これらは、進化論と超人とを結び付けようとした言説とともに、自然主義を何とかこれまでの啄木の哲学の中に接合しようとしたものにほかならない。しかし、ニーチェの哲学や一元二面観を説明したあと、この評論の末尾には「予は、予の半生を無用なる思索に費したるを悲しむ。知識畢竟何するものぞ。人は常に自己に依りて自己を司配せんとす。然れども一切の人は常に何者にか司配せらる。此『何者』は遂に『何者』なり。我等其面を知らず、其声を聞かず。之を智慧の女神に問へども黙して教ふる所無焉」と書き、その試みが不調に終わったことを示している。^③啄木は「天才主義」をひきずったまま、東京での文学生活を開始することになる。

五

その後、啄木は、明治四十一年七月六日の日記に、金田一京助との会話として「明治新思潮の流れといふ事に就いて、矢張時代の自覚の根源は高山樗牛の自覚にあつたと語つた。先覚者、その先覚者は然しまだ確たるものを攫まなかつた。……自分自身の心的閱歷に徴しても明らかである。樗牛に目をさまして、戦つて、敗れて、考へて、泣いて、結果は今の自然主義（広い意味における）！」と書くなど、樗牛に言及しながら天才主義の敗残の様相を自嘲的に語っていたりしたが、明治四十二年の秋以降、妻節子の家出をきっかけに、啄木はそれまでの生活を反省し、空想的・浪漫的態度から、具体的・現実的なものに価値を置くようになった。田中王堂（喜二）のプラグマティズム哲学に傾倒するのもこの時期である^⑤。

樗牛から王堂へといった啄木の思想変遷の底流にあるものは、「本能」「欲望」の価値を再評価することである。そして、この時理解される樗牛は、かつての「天才」主義の主唱者としての樗牛ではない。

ここで、この時期の啄木が共鳴した評論家徳田秋江（後の近松秋江）に注目したい^⑥。秋江は、樗牛、王堂に教わり、師事してきた人物である。秋江は、「本能満足論は、或る意味に於て恰もルツソーの『自然に反れ』の辞義と同じく、直接にして力あれども、つまり鉞也^{あがね}。之れを調整せざるべからず候。田中喜一氏が具体理想主義に於て『人間の實質は理想を以つて情欲を調和するに在り』といふは、即ち本能満足説を、内容的のまゝに調整せんと企つるもの」だと指摘する^⑦など、樗牛と王堂のつながりを示唆している。また、同時に、「高山イズムと後の高義自然主義とに關係」（『文壇無駄話』明四二・五・九）のあることを指摘し、あえて

一〇四

樗牛と自然主義とを区別しようとする論調に異を唱えている。

自然主義の註釈者は、今の自然主義と高山氏の本能満足説―美的生活論―とを区別しやうとする。曰はく、本能満足説は実行上の主義である。自然主義は芸術上の主義である。と。何うしても註釈者の口吻である。創始者の口吻ではない。創始者の言説には常に幾多の陥欠がある。が、註釈者の遂に持つことの出来ない生命を有つてゐる。固に芸術上の自然主義と人生観上の本能満足説とは前述の如き区別はあるに相違なからうが、併しそれは実に一つの側面観に過ぎぬのではないか。

（『文壇無駄話』「読売新聞」明四一・八・二三）

島村抱月は、樗牛を「自然主義運動の先蹤」として、「我が邦に於けるスツールム、ウント、ドラングの驍將」（『梁川、樗牛、時勢、新自我』明四〇・一二）と指摘し、「今の自然主義は実に此の小ロマンチズムの後に起つた特殊の現象である」（『文芸上の自然主義』「早稲田文学」明四一・二）とした。しかし、抱月は、自然主義を芸術上の態度、「観照」の態度とし、「本能満足主義」に基づく「実行」とを弁別しようとした。また、美的生活論争で樗牛に対峙していた長谷川天渓は、「自然主義は、文芸上の問題であつて、本能満足主義とは、人生上の実行問題である」（『自然主義と本能満足主義との別』「文章世界」明四一・四）と述べ、やはり「自然主義文芸」を「本能満足主義」＝「実行」とを区別している。

林原純生は、「日本の自然主義は、その発生、成立、『私小説』の創出を通して『美的生活論』の問題圏内にあり、自然主義の形成は『美的生活論』に提示された問題を内在化し、自然主義陣営の内外に渡る発言は、『美的生活論』に対する反撥と牽引の中に、すなわち日本の自然主義は

『美的生活論』の掌中の運動だったのである」とし、さらに「『実行と芸術』の問題こそ、何よりも『美的生活論』から直接継受した問題」であることを指摘しているが、抱月、天溪の態度は、樗牛のロマンチズムのみを認めて、それと表裏のものであった「本能」肯定の思想を弁別しようとしたのである。秋江の批判は、そうした抱月、天溪らの姿勢に向けられていた。

また、このような「実行と芸術」を区別する考え方、あるいは抱月らの「観照」論に対して、啄木は、「一切の文芸は、他の一切のものと同じく、我等にとつては或意味に於て自己及び自己の生活の手段であり方法である」（『食ふべき詩』「東京毎日新聞」明四二・一一・三〇、一二・二三、四、五、六、七）という視座から批判すると同時に、一方で、「本能」に関しては次のような考え方を示している。

人間を實際以上に評価してゐた事は、人間それ自体の生活を改善する上に刺戟を与へた功績はあつたけれども、畢竟、過去の人間の抱いた謬想中の最も大なる謬想であつた。

人間を實際以下に評価する事は、人間それ自体が特に偉いものだという謬想を破るべき自省を起した効果はあつたけれども、遂に、現代の人間が抱くあらゆる謬想中の最も大なる謬想である。

謂ふ心は、「人間も他の動物の司配されると同じ法則に司配されるものだ。」といふのは可い。それだけなら何の差障りもない。が、「だから、人間の一切の行為中、他の動物も有するだけの範囲以外の事は、総て虚偽である。」といふやうな考へ方をするのは、恐るべき誤謬だといふのである。

（「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」「スバル」明四三・二）

啄木は、「天才主義」を棄てる一方、「本能」主義的にのみ人間を理解することを諫めている。その点、秋江が「理想とは、生物—その中には無論自然主義の文学者もあり—が、自己の生存欲を到達する際に『あ、しやう、かうしやう』といふ、思意の形式に他ならず候」（『文壇無駄話』「読売新聞」明四二・七・四）と、「理想」と「現実」の問題を矮小化していったことと対照的である。

また、この時期、「自分及び自分の生活といふものを改善すると同時に、日本人及び日本人の生活を改善する事に努力すべきではありませんか」（大島経男宛、明四三・一・九）というかたちで、啄木に個人の欲望の肯定が他者の欲望への肯定に結び付かねばならないという考え方がみられることにも注意したい。「自己発展」と「自他融合」の問題は、「實際的、具体的、政治的」（『文学と政治』「東京毎日新聞」明四二・一二・一九、二二）な場で論じられようとしていた。

しかし、「欲望」は調整されねばならず、その範囲としての「国家」と矛盾、衝突することもある。明治四十三年三月の「意識しての二重生活」宣言は、「国家」という既定の枠組みそのものをも相対化するものだった。そんな時期に起こった大逆事件は、啄木に社会主義、無政府主義思想へと近づけ、より「外部」の視点へと導いていくことになる。

ところで、啄木の最後の小説「我等の一団と彼」（明四三・五・六執筆）に、樗牛の話が登場する。新聞記者同士である高橋と亀山の会話の中である。「僕にもこれで樗牛にかぶれてゐた時代が有つたからねえ」という高橋は、「常に鋭い理解さへ持つてゐれば、現在の此の時代のデレンマから脱れることが出来ると思つてゐた。然しさうぢやないね。それも大いに有るけれども、そればかりぢやないね。我々には利己的感情が余りに多量に有る」という。亀山はそれを「時代の病氣」だといい、「何うかしたくつても何うもすることが出来ない」、「我々が此の我々の時代

から超逸しない限りは。——時代を超逸するといふのは、樗牛が墓の中へ持つて行つた夢だよ」と言う。これに対して、高橋は「さうだ。あれは悲しい夢だね。——然し僕は君のやうに全く絶望してはゐないね。」と言うのである。ここで描かれるのは、樗牛の有名な「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」という言葉をめぐるものである。この一文のもとなつた文章は次のようなものである。

現世に於ける一切の学智と道德とは、其の根底に於て既に現世を是認す。彼等は現世を超越せずして附随し、審判せずして讚美し、戒飭せずして阿従す。一代の文教詮じ来れば現世の註釈に外ならざるのみ。

山に入て山を見ず。此の世の真相を知らむと欲せば、吾人は須らく現代を超越せざるべからず。斯くて一切の学者と道德とを離れ、生れながらの小児の心を以て一切を観察せざるべからず。

〔無題録〕「太陽 明三五・一〇」

徳田秋江がこの「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」という言葉を「一片の空想に外ならず」(「文壇無駄話 明四二・五・九」とするのは、秋江が樗牛の中に「本能満足説」しか見ていないからである。一方、啄木が、高橋の言葉を通して、それを「悲しい夢」とするのは、樗牛が時代を「超越」しようとして「超越」できなかったことを指すと同時に、「利己的感情」を抱えた個人が具体的にどのようにな他者と関わるのかという問題を新たな視座から見ているからであろう。

「利己的感情」を抱えた個人、欲望する存在としての個人が、どう他者と関わっていくのか、樗牛、嘲風、王堂の思想の受容を経て、啄木は、社会主義、無政府主義について改めて考察していく。「時代閉塞の

現状」中の「明日の必要」という言葉は、王堂哲学からクロポトキンの思想への結節点として発せられたが、それは遠く、日清戦後の樗牛の個人主義の「第一声」とも響きあうものをもっていたのである。

注

- ① 伊東圭一郎『人間啄木』(岩手日報社、一九五九・五)
- ② 伊藤淑人『石川啄木研究』(翰林書房、一九九六・一二) 参照。
- ③ 中島徳蔵「ニイチエ対トルストイ主義」(『丁酉倫理会講演集』第七 明三四・六・一五)。なお、「孤島」署名で、同じく中島徳蔵の「十九世紀末の二大教説(トルストイ伯とニイチエ氏)」(『読売新聞』明三四・四・一、八、二二)がある。
- ④ 木股知史「同時代思想のなかの石川啄木」(『宇部短期大学学術報告』一九八三・七)
- ⑤ ④に同じ。
- ⑥ 「閑天地」(『岩手日報』明三八・六・七)に次のように書かれている。
我嘗て、人性に第一我(物我、肉我)と第二我(神我、霊我、本来我)あるの論を立して、霊肉の抱合もしくは分離争闘より来る人生の諸有奇蹟(あらゆる)を解釈し、一日姉崎博士と会して之を問ふ。博士曰く、第一と云ひ第二と云ふ等級的差別を画せんよりは、寧ろ如かんや、意識以下の我、及び意識以上の我と呼ぶの、用語に於て妥当なるに、と。然り、第一第二の別はたゞ我が弁説の上に煩なきの故を以てしか称呼したるのみ。
- ⑦ ④に同じ
- ⑧ 例えば、長谷川天溪の発言のほかに、樗牛を擁護した側の登張竹風においても「人間の根本的本能は、自由の本能なり。自由の本能とは無限なる自由を得むとする欲望の謂なり」(『フリードリヒ、ニイチエ』「帝国文学」明三四・六・八、一二)といったように、「本能」を強調したニイチエ解釈が見られる。
- ⑨ ④に同じ。
- ⑩ なお、伊藤淑人は、「この〈实在〉〈現象〉という両界は、物質と精神だけでなく、現実と理想と置き換えることもでき、〈権力意志〉〈意志消

滅」の思想は、自我と他我、個人と社会というように発展し、将来の啄木の文学論を拓げていく可能性は充分に持っている」と指摘している。本稿も、これに従いたい。

- ⑪ 国崎望久太郎『増訂 啄木論序説』（法律文化社、一九六六・二）五七頁。

- ⑫ ここでは、姉崎嘲風・山川智応共編『高山樗牛と日蓮上人』（博文館、大ニ・六）所収のものを引用した。

- ⑬ 上田博にも「このとき啄木の樗牛理解は多分に姉崎のフィルターを通してみた樗牛と考えてよいだろう」という指摘がある『石川啄木の文学』一二九頁 一九八七・四。

- ⑭ 例えば「凡人を作るのが教育の目的には非ざるぞかし。天才無き人類を想像せよ、是れあらゆる想像中の最醜最悪なるものに非ずや」（無題録「太陽」明三五・一〇）などの樗牛の発言がある。

- ⑮ ただし、「小児の心」という言葉自体は、明治三十六年七月二十三日の日記などにも使われている。

- ⑯・⑰ ④に同じ。

- ⑱ なお、「秋風記 綱島梁川を弔ふ」（北門新報 明四〇・九・一八、二四、二六、二七）で展開された一元二面観では、「人生の両面は何に基くか。曰く、『生命』の二つの欲望に基く。二つの欲望とは何であるか。曰く、自己発展の意志と自己融合の意志である」とあるように、「欲望」という言葉が使われていることに注意したい。

- ⑲ 進化論を是認する者は、常に過去に於ける進化を是認するに止まらずして、又当に未来に於ける進化をも是認せざるべからず。猿猴の化して人類となる事或は望むべからざらん。然も人間が人間以上たらんとする希望は、如何なる力を以てしても之を滅却する事能はじ。

- ⑳ 野村幸一郎「明治の社会ダーウィニズムと美的生活論争」（『森鷗外の歴史意識とその問題圏』所収 二〇〇二・一一）

- ㉑ 「無題録」（『岩手日報』明三六・一二・一八、一九、「戦雲余録」（『岩手日報』明三七・四・二八、二九、三〇、五一）、『林中書』（『盛岡中学校校友会雑誌』明四〇・三・二）、「初めて見たる小樽」（『小樽日報』明四〇・一〇・一五）、「北海の三都」（明四一・五・六稿）。

- ㉒ 池田功「石川啄木―社会進化論の影響（二）」（『明治大学大学院紀要』一九八六・二）は、樗牛のこの一文を『進化』なる語はないが、進化論の影響を十分に受けて書かれている」とし、「啄木は当時の一大流行思想であった社会進化論を背景に、樗牛の『法則と生命』を手中にすることに

より、常に自分を『青年』のイメージに与することにより、『事物』を進歩、進化させてゆかねばならぬという強い認識を持ったのである」としている。しかし、啄木の引用の真意は、むしろ「進化論」も含めた「法則」の否定にあったというべきであろう。確かに池田が引用しているように「所謂社会思想を論ず」（『太陽』明三〇・七）には、社会進化論に即した適者生存の考え方が樗牛には見られるが、「文明批評家としての文学者」あたりを境に、「進化論」も含めた「法則」を手放したと見るのが妥当であろう。にもかかわらず、啄木が進化論を持ち出すのは、社会ダーウィニズムが説明するような現実を実感として受け止めたうえで、自分の思想の中に何とかしてとりこもうとしているからにほかならない。

- ㉓ 三宅雪嶺「宇宙」（明四二・二）「第三篇第十五章超人」所収。啄木が読んだ初出は、『日本人』と『日本及日本人』に「原生界と副生界」の題で、明治三十九年二月から、四十一年十月まで、約二年半にわたって連載されたもの。『明治文学全集三三 三宅雪嶺集』（筑摩書房、一九六七・三）参照。

- ㉔ 拙稿「石川啄木『卓上一枝』論―自然主義の受容をめぐる―」（『立命館文学』一九九〇・三）

- ㉕ 上田博『石川啄木の文学』（桜楓社、一九八七・四）

- ㉖ 拙稿「啄木と近松秋江―『実行と芸術』批判の位相―」（『神戸山手短期大学紀要』二〇〇四・一一）

- ㉗ 徳田秋江「文壇無駄話」（『読売新聞』明四二・五・九）

- ㉘ 林原純生「美的生活論、自然主義、私小説」（『日本文学』一九七八・六）拙稿「啄木『時代閉塞の現状』論―『必要』をめぐる―」（『国際啄木学会台湾高雄大会論文集』二〇〇三・七）

（神戸山手短期大学助教授）